
コギトの雨

海老

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ギトの雨

【Zコード】

Z3507P

【作者名】

海老

【あらすじ】

命の光を陰らせる意思” プラトーン” の侵蝕が広がっていく大地。渴いた世界に逞しく生きる人々と、少年スムの想いの力を巡る物語。

一、「ギト」との旅路

僕達は今、もうビリまででも続いているところ、ずっと一面の赤土の上を、何日も何日も一人ぼっちで歩いています。草も木もほとんど生えていないし、何か生き物がいるでもない？昨日も、一昨日も同じ景色を見ていたようで、なんだか頭がぐるぐるになります。

「ギトはあまりおしゃべりをしませんし、端整な顔立ちとスラリとした身体に似合はず、とても屈強なお兄さんですから、どんどんと行ってしまうばかりで、それらと暑さとで僕はすっかり気が滅入つてしまつのです。

――前のおじいさんが、お前ももう十になると言つておりましたから、僕ももう十二くらい。それなのに「ギトの足には、まだまだ全然ついて行けないです。

前まで立ち寄っていたカザリゼの街では、しつかりしているとか、頑丈で良いだとか、殊更に賢いだとか、宿にいた大人の人達にたくさん讃めて貰つたばかりなのに。

しかしもちろん「ギトは心根の優しいお兄さんですから、時々丈夫だろうかという顔でこちらを伺い、僕を気に止めてくれます。？そして今度も俄かに足を止めこちらを振り返りましたが、なんとかいつもよりも穏やかな顔をしておりました。

「ほらん、スム。ここまでくれば君にも見えるだろう。ちょうどあの岩の右の向こうに白く何か見えやしないかい。あれが次の街だよ。」

「ギトが優しく言いました。けれど僕は「ギトのところまでずっとくらすんくらとなんとか辿り着くと、それはもう本当にぐたびれた声で、なんともむすつと可愛げなく答えました。？」

「僕、やっと見えたのは本当に嬉しい。でも「ギト」には見えていたなら、何故もっと早く教えてくれなかつたの？」

「ゴギトは僕の反応が意外であつたとみえて慌ててこちらを見下ろします。

「ああ、すまなかつた。けれど、前に街が見えたと話した時は、全然見えないとスムは怒つたろう。それだから今度は、スムが見えるくらいまで黙つておいたのだけれど。」

「ゴギトは曰が良すぎるんだ。前の時はゴギトが見えたと言つてから、僕が見えるようなるまで一時間も歩いたじゃないか。」

「ゴギトは少し困った顔をして、黙つて僕の頭を二、三べんサラサラと撫でました。そうして一呼吸おくと、続いて先程よりも随分低い声で言いました。

「この地域は昔からプラトーンの浸蝕^{しんしょく}が激しかつたけれど、また随分と進んでしまつた。以前はカザリゼからあのアイーダの街との間に、幾つか集落^{しゆりょう}があつたのだけど。」

そう言つとゴギトは、しゃがみ込んでまるで死んでしまつたように見える大地の土を一掴み取り、その塊を指でボロボロと崩しました。

「渴^{かわ}いてしまつてゐる。人も大地も。」

何もない一人だけの大地にさみしく風が吹き抜け、その土くれをさらつていきます。

「何故^{なぜ}、どうしてプラトーンは広がつていいく。いつかおじいさんと住んでいた、僕の街にも来てしまうのだろうか。」

黙り込むゴギトに、僕は少し不安な気持ちで聞きました。

「プラトーンとは意^い思だ。憎^{にく}しみか、或^{ある}いは過度^{かど}の文明を持ち過ぎていた人間^{じんげん}という種^{しゅ}の自らを抑制^{よくせい}する本能^{ほんのう}か。それを止めるのは難しい。このまま空も大地も人も全て渴いて世界が終わつてしまふのか。それは誰にも分からなんだ。」

いつになく厳しい表情のゴギトに、僕はなんだか怖いような気持ちになりました。

それを察したのか、ゴギトは珍^{めずら}しく少し声に力を入れて、励ますように言いました。

「大丈夫。世界中でプラトーンの研究は進んでいる。この渴きにも
きっと終わりは来るよ。」

「ギトはまた、僕の頭を優しく撫なでました。

「僕、本当にそうだといい。」

「ギトの顔を見上げると、僕には何故だかその顔がどこか淋しそうに見えたのでした。

「さあ行こう。もう少しだけ頑張がんばつておくれ。」

そう言ってギトは顔を前へやると、何かを見つけた様子で言いました。

「見て、こちらに向かやって来るよ。」

すると街の方でキラリと何かが光ると、ホバーらしき乗り物が音もなくこちらに向かつて走つて来るのが見えました。

「ギト、あれはホバーのようだよ。なんて立派で速いんだ。僕、本物ははじめてだ。」

僕はプラトーンの事はすっかりいいにして、ホバーに夢中になつておりました。

再び歩き出して暫く、ああ、あんな乗り物があつたらどんなに楽だろうかと思いどうにか調達ちゅうたつする方法を一人であれこれ思案しもんしておりましたが、やっぱりどうにも高い物ですから、今までにはないと、ちらりとギトの顔を盗み見たりしておりました。

すると、先程のホバーらしき乗り物がみるとこちらに向かって来て、目の前ですうっと止まりました。

「どうも、旅の方。方角からして、カザリゼからいらっしゃいましたか。」

ホバーに乗つていたのはいかにも腕つ節ぱじのある逞しい男性でした。

「どうも。そうです。カザリゼから参りました。」

「ギトが丁寧ていねいに答えます。

「歩いてとはたいへんだつたでしょう。この辺りは暑きびでも厳しいですから。時に旅の方、カザリゼからこちらの方に、あのマクスウェルの魔物が向かつたという噂うわさを聞きました。危険ですから街までお

送りしましょ。あ、いや、これは失敬、私はアイーダの護衛を任されているものでして。」

ホバーの人は跨またがつたまま、ゴーグル付きの帽子ぼうしを取つてペコリとしました。

「そうですか。それは暑い中じゆご苦労様です。本當にお心遣い感謝いたします。しかし私達は、歩いてアイーダまで参るつかと思ひますので、どうか護衛ごえいのお仕事おしごとにお戻り下さい。」

「ギトはまた丁寧ていねいな口調くちようで言いました。

「ジ修行中か何かですかな。ご立派な事です。しかしまクスウェルの魔物の力は恐ろしく、目で見ただけで人を燃やしてしまうと言います。先日のかザリゼではたいへんな騒さわぎだったようです。くれぐれもお気をつけ下さい。では。」

護衛じえいの男性はヒラリとホバーの先頭を向き直すと、街に取つて返して行きました。

男性の姿は瞬またたく間に小さくなり、いつしか何処かに見えなくなりました。

「すまないね、スム。」

「ギトが淋さびしそうに笑つて言いました。

「大丈夫だよ。もうすぐそこなのだし、ここまで来たら自分の足で着きたいもの。」

本当はあのホバーのようなのに乗つてみたい気持ちもありましたが、「ギトはなるべく人と関わらないように旅をしておりますし、カザリゼでの事もありましたから、仕方しかたのないことなのでした。

「よし、僕、「ギトよりきつと早くに着くよ。」

僕はわざと大きな声で言つと、わつきより随分と元氣良よくく歩き出しました。

暫く歩くとやはり頭かぶがぐるぐるしましたが、わつきより幾分いくぶん良いと思えました。

1-1 アマンダとの再会

アイーダの街は決して裕福ではないけれども、遺跡の発掘と研究が盛んであるとある時コギトが言つておりました。けれど研究者以外の人影もあちこち少なくはない、この土地の厳しい環境の中でも街の人々は懸命に生きていくように思えました。

こういった貧しい街や村は、世界中にはまだまだたくさんあるとコギトは言います。

何百年も前は世界中があのニライカナイとか、エゾとか蓬萊とか呼ばれる小さな島の噂みたいに、もっと縁や水が豊かで雨も一ヶ月のうちに何日も降つたらしいのです。

プラトーンの浸蝕^{しづしゃく}がはじまって今みたいなふうになつてしまつたのは、大きな戦争のせいだと、星の寿命^{じゅみょう}のせいだと色々な説があります。アイーダはそんな“大きな戦争説”を唱える偉い学者さん達が、この土地の地下に多く見られる遺跡を発掘されていそうなのです。

遺跡には旧世界^{きゅうせかい}の文明がたくさん眠つていて、その研究と実用化が進められているのですが、あまりの技術の差にほとんど手が出せないというふうらしいのでした。

アイーダの警備^{けいび}の方が乗つっていたあのホバーのような乗り物も旧世界の文明の一端^{いったん}で、電気的な力で駆動^{くじゆう}する物だつたため今ではすっかり実用化されております。けれどもそれを生産する技術は今はまだないといつしか本で読んだのでした。

その本によりますと、旧世界では空を飛ぶ乗り物さえたくさん造られていました。あの空を飛べたらどんなに素敵だろうと、僕はその本を読む度に随分と思いました。

ですからせつかく遺跡の研究所のあるアイーダに来ておりますので、学者さんのお話を少しでも聞けたら良いと、実はなんだか少し期待するような気持ちがありました。

「ギトは旅の目的である人探しの有益な情報が、どうやらこの街にはあると見て訪れたようです。交易のあまりないアイーダに、手掛けりがあるようには僕にはどうにも思えないだけれど。

「まずアマンダという女性に会おつ。」

街の入口をくぐるとすぐ、「ギトはそう言いました。

「とりあえず少し休みたいのだけダメだろつか。」

僕はまさかこのまま一休みもせず行くのかと少しがみよつとして言いました。

「ああ、もちろんそのつもりさ。すまない、少し気が急いでしまったね。スムはよく歩いてくれたから、まずは先に宿に行こう。彼女に会いに行くのは食事の後でも良いのだし。」

僕はふうっと胸を撫で下ろすというような気持ちを、ギトにはなるべくわからないようにお腹の辺りにじんわり留めました。

「ギトは汗もかかないしあまり疲れたりもしないものですから、時々僕には必要な休憩という大切な事柄を忘れてしまう事がありますので、今度もそれじゃあなからうかと思ったのです。けれどもうやら違うと安心しましたので、早速次の質問です。

「アマンダさんはどういう人だろう。初めて聞く名前だけれども、いつたいギトは知り合いなの。」

「アマンダのお父様が恩師でね。彼女は小さな頃から知っていると いう訳さ。随分立派な学者さんになつたと聞いてるよ。」

「ギトはなんだか嬉しそうに話しました。

「では早く会いたいと思うのは当たり前だね。けれども、ごめんなさい。やっぱり少しだけ休ませて欲しいです。僕、疲れてしまつたみたいで。」

僕はギトが滅多にしない昔の話をしてくれたのも嬉しかったし、本当に懐かしいというふうな顔を見て、ああ、早くにアマンダさんという方に会わせてあげたいと思いましたが、どうにも本当にクタクタだったのです。

「ありがとう。スムは優しい子だね。本当にそつねうよ。おじいさ

んが良くお育てになられたようだ。ではもう宿へ行こう。僕も今日はお水をいただこうかな。ああ、僕はそこで場所を聞いて来よう。

「ギトはそう言つと道の脇のお店に入つて行きます。何のお店だれつと田を凝らしましたが、屋根から太陽光発電のパネルから看板まで、日照りと土埃のせいにか色がぼやけて文字がよくわからなくなつていました。

しかし「ギトが水を飲むだなんて、本当に珍しいのです。いつだって食べ物は一切食べませんが、ごくほんの時々水を飲む時は、いつも何か嬉しそうな時のようになります。ですから今度もそのアマンダさんに会えるのが、よほど嬉しいのじゃなかろうかと思いました。

「待たせたね、スム。あつちだそうだよ。」

そう言つて「ギトは、真っ直ぐに街の真ん中の方へゆたりと歩きました。

暫く行くと、街の半分から向こうの方に大きな建物と色々な形の掘削機^{くつさくぎ}が見えてきました。

「あれが彼女と彼女のお父様の作ったラボラトリだよ。宿はその向こうだそうだ。」

僕はなんだかドキッとしました。だつていいくら立派な学者さんでも、まさかこんな大きな研究所を持つているだなんて思いもよらなかつたのです。

僕は俄かに緊張して、なんだか疲れが駆け足で何処かへ行つてしまつたといつぶつでした。

「どうだい、スム。君は学者さんを田指しているのだから、こんな大きなラボラトリを見ると、やはり気持ちが飛んだようだろ。アマンダに頼んで中を見学させてもりつとい。」

「ギトはきつと僕を驚かせようと黙つていたのだと思いました。

すると研究所からこれから発掘現場に向かつといつような格好をした、美しい女性が出てきました。

女性はこちらを見て、田を円くして言いました。

「そこの方、もしや『ギトじやありません。』

「ギトは突然の事で何だか分からないという顔をしましたが、すぐに落ち着いた声で言いました。

「やあ、アマンダ。本当に久しぶりだ。随分と美人になつたね。」

「ギトの言葉で僕もすぐに女性がアマンダさんであるとわかりましたが、一人の再会の邪魔じやまになつてはいけませんのでそつとして黙つておりました。

「やっぱり『ギトね。本当に久しぶり。前より顔色が良くなつたみたい。安心しました。でも美人になつただなんてあなたしくない物言いですこと。お父様がいなくなつてからは発掘作業の現場にも顔を出さなきやならなくなつたからお肌が随分と荒れてしまつたし、盗賊とうぞくが増えたせいで良いお化粧品けしょうひんもなかなか取り寄せられないわ。」

アマンダさんは少しまいつたような顔になりました。

「そうか。それは苦労をしているね。しかし身も心も充実しているというふうだ。そう見えたから美しくなつたと感じただのだけれど。」

アマンダさんはほんのしばしキョトンとした顔をしましたが、すぐにはクスクス笑うと続けて言いました。

「そうね、ごめんなさい。やっぱりとってもあなたらしいわ。また会えて本当に嬉しい。歓迎します。アイーダへようこそ。ではそちらの子をご紹介いただけるかしら。」

「スムです。スムと言います。」

僕は『ギトが何か言い出すか言へ出れないかの間に、変に畏かひまつて大きな声で言いました。

アマンダさんがすごい学者さんでらつしやるという事ととても美人だったのとで、僕はもうなんだか本当にすっかり緊張しておりました。

「まあ、元気が良い。男の子ですものね、そうでなくっちゃ。『ギトもスムを見習わなくちゃね。』

「ギトは困つた顔で少し微笑ほほえんでいます。

僕はその様子を見て声を出して笑いました。それはアマンダさんに誉められて少し得意になつていてもありましたが、いつもどこか淋しいような悲しいような顔をしているゴギトが、カザリゼの一件以来更に元気のないよう見えていたのです。それが今日はなんだか特別楽しそうでしたので、僕も一緒になつて嬉しくなつていたのでした。

「ああ、アマンダ、宿はどちらかな。」

「ゴギトがちらりと僕を見て切り出しました。

「ラボの向こう側よ。案内します。宿というより、ラボの研究員のための宿泊施設を一般の方にも宿として利用していただいているものだから、あまり期待はしないでね。でも口を利いておきますから、自由にお使いになつて。」

「ああ、本当に助かる。ありがとうございます。一部屋お願ひするよ。僕達はスムが休まればそれで良いから。」

「ゴギトは小さく会釈をしながら言いました。

するとすぐにアマンダさんが、優しく笑つて言います。

「気にならないで。ちゃんとゴギトも泊まれるように一人部屋を用意しますね。でもスム、ゴギトと一緒にあ色々と疲れちゃったでしょう。この人、真面目なのは良いのだけど冗談の一つも言わないのだから。」

ああ、アマンダさんは、きっと僕よりもゴギトの色々な事を知っているのだなと思いました。

「アマンダ、それくらいで堪忍しておくれ。それより君、お仕事はいいのかい。発掘作業をする格好に見えるけれど。」

「ゴギトは話を逸らすように言いました。

「あら、こんなに特別なお客様を放つておいて掘り起こす物なんてあるものですか。それにこう見えても、ここでは私が一番偉くてよ。」

「アマンダさんはさも得意そうに言いながら歩き出しましたが、なんだか嫌味が全くなく、その真っ直ぐな心根が窺えるようでした。

「ではお言葉に甘えて。

「ゴギトがまた小さく会釈をしながら歩き出しました。

大きなラボを横切つて宿に着くと、今まで立ち寄った幾つかの街のどの宿とも、それ程の差のない建物がポツリと建っていました。

「では少しお待ちになつて。食事の用意もすぐに出来ますから。」

アマンダさんはそう言って二コリとすると、建物の中に僕達を招き入れました。

中に入ると、宿の利用者やら係の人やらが次々とアマンダさんに挨拶をしました。アマンダさんはその一人一人に、同じように笑顔で接します。挨拶を返したり労つたりしながら、偉ぶるでもなく自然に奥へ進んで行きました。

そしてフロントのヒゲを生やした男性に事情を話し、部屋へ案内するよう言いつけると、自分は腕まくりをしながら厨房らしき奥の方へ入つて行きました。

僕はアマンダさんが美しいやら格好良いやらで、なんだかポカんとしてしまいました。

「ああスム、どうしたんだい。」

はつと我に帰ると、もうゴギトは先程のヒゲの男性に連れられて、部屋へ行こうと階段の木の手摺りに手をかけていました。僕はすぐに駆け寄つて、ゴギトが代わりに持つてくれていた僕の荷物を受け取ろうとしましたが、黙つて頭をポンポンとやられました。

部屋へ入ると、ゴギトはベッドの横に荷物を降ろし、砂避けのロープを脱ぎ、また荷物の上に軽く置んで置きました。いつも通り僕も同じようにすると、なんだか急に疲れたというふうに、ずしりと身体が重くなつたようでした。

靴を脱いでそのままベッドへ倒れ込むと、ゴギトと何か数言交わしているうちに、僕はいつしか眠つてしまつていきました。

III、スムとアマンダ

「スムはビーナスだらう。商店の立ち並ぶ、豊かな街並。

ああ、スムはきっとカザリゼだ。

一画面はさうひと画面。さつきから雨が降っていたんだ。

おおい、みんな雨だよお。

なんだ、どうして誰もいないのだらう。こんな雨、滅多にないと
いつのこ。

おや、遠くに誰かがいる。

ああ、あれは、間違いない。マギトだ。

こんな雨の中、びしょ濡れで何をしてるのだらう。

マギトの向こうで何かが赤く光っている。

何がが、燃えているんだ。

あれは

人だ。

「スム、起きてスム。もう夜になつてしまつわよ。」

ふあつと突然景色が変わり、どこかでアマンダさんのやわらかい

声がします。優しく愛情に満ちた美しい声です。

「つひとつするような、どこまでも落ち着くような、なんとも言えない穏やかな気持ちで、僕はその声に耳を傾けます。

そうしていると右の肩の辺りを小さく揺すられる感覚が、徐々にはつきりとできました。

「スム、さあそろ起きて下さーな。」

すつと頭に血が通ったような感覚の後、ああ、どうせすつかり眠ってしまったのだと気付きました。

僕はのつたりと目を開けると、そこにはもうすぐじゅうを覗き込むアマンダさんがおりました。そしてその顔があんまりに綺麗で、僕はドキリとして我に帰りました。

「ごめんなさい、僕眠つてしまつたのですね。」

ゆっくり身体を起こすと、アマンダさんは一コロとして言います。

「歩き詰めだつたものね。起こしてしまつて」「めんなさい。」

そう言つてアマンダさんは立ち上がり、窓をガチャリと開けました。

「こんな場所でも夜の風は気持ちいいわ。食事の間いつかおべと、寝る時にはシーツが冷えて気持ちがいいの。」

辺りはすっかり真っ暗で、窓からは薄い金色の月と星の光が、音もなく降りて参りました。

「僕、随分寝てしまつたみたいですね。どうだ、ゴギトまでびつしまつたか。」

そういうえば姿が見えません。

「ゴギトは出掛けたわ。ゲル二カ山脈を越えた先まで行くものですから、もひ部分は帰つて来られないの。黙つて行つてすまないって。

「僕はびっくりしてベッドから飛び起きました。

「そんな、ひどいや。いったいどうして行つたのですか。それにゴギトは帰るまで僕はどうやってこよつ。」

僕はひどく泣きそつとなりました。

「そんなに慌てなくてもちやあんとゴギトと話してありますよ。行き先は少し複雑な事情だからまた明日やつくりお話しするとして、ゴギトが帰るまでスムには私の助手をしてもらいます。しつかり勉強するのよ。だから暫くはここがあなたの部屋ね。」

アマンダさんは一ヶ口リと笑いました。

アマンダさんの言うそれは僕にもうたいへん喜ばしい事だったのですけれど、寝ぼけた頭に突然たくさんの感情がどっかり押し寄せたものですから、なんだかもう自分でも訳が分からぬというふうでした。

僕がフラフラとしながら、なんとかよろしくお願ひしますと捻り出すと、アマンダさんはこちらこそとペコリとしました。

ああ、本当にいい人です。

「ねえスム、あなたのゴギトの事で色々と気になつてゐるのぢやないかしら。何故本人に聞いてみないの。」

アマンダさんは木の椅子に腰掛けると、少し低い穏やかな声で聞きました。その日は真っ直ぐに僕を見ています。

僕は本当の事を話さなければいけない気がしました。

「僕、気になる事ならたくさんあります。でもゴギトは、それを聞いたらきっと悲しい目をする。嫌なんです、ゴギトがこれ以上悲しそうになるのは。」

僕は本当にそう思いました。

「そう、優しい子ね。ゴギトはあなたと一緒につと良かったわ。でもこの先彼と一緒にいるのなら、あなたは知らなければならない。彼もここを出る前にそれを望んでいたわ。」

アマンダさんの目まだ真っ直ぐでした。

「本当は聞くのが怖いです。でもアマンダさんは全て知つていて、ゴギトに普通に接しているのですものね。」

僕はアマンダさんの視線を避けるようじつむいて言いました。

「そうねえ。昔は恋だつでしたわ。」

僕は俄かに目を円くしました。

「「ギターですか。」

「やうよ。でも彼、ああいう人でしょ。気付きもしなかったわ。まさか自分に恋心を抱く人間がいるだなんて、夢にも思はないのでしょ。まあ昔のお話ですけれど。」

アマンダさんは淋しそうに笑います。

僕はアマンダさんのように、大好きな「ギターの事をちゃんと知りたいと思いました。

「ギターがいつたいどんな思いで生きているのか。その思いに、僕はどう応えられるのか。

「「ギターの事、教えて下さりますか。」

僕はたいへん勇気を出して言いました。するとアマンダさんは、どこか今にも泣き出しそうといつぶつな顔で言いました。

「ええ。ええ、勿論よ。ありがとうございます。スマ。」

アマンダさんは僕の頬にそっと手を触れて、小窓へ「クリと領きました。

「でも「ギターの事を話すのには、本当に時間が必要な。明日、行き先の事と一緒にゆっくり話すわ。だからその前に、カザリゼで何があつたのか聞かせてくれないかしら。話してみたら、少し楽になるかもしれないわ。」

僕はしばらく黙つておりましたが、アマンダさんの目を真っ直ぐに見ていました。

「わかりました。」

そして膝を抱えて窓の方を見ながら、ゆっくり、ゆっくり、カザリゼでの出来事を思い出したのです。

四、カザリゼの街並み

港が近く、大規模な太陽光発電施設を有するカザリゼは、最大の交易の街として世界中で知られていました。

海の向こうで生産されている、バギーなど大型電化製品の卸売で、街の経済は非常に安定しています。

それはバッテリの性能が向上したことで、カザリゼの南に位置するアイーダを除く六つの街まで、通常のバギーでも充電が持つようになりましたからだといいます。

アイーダまで充電する事なく運行出来るのは一部の超大型バギーだけで、その運行は充電に膨大な電力がかかる事から、今ではほとんどされていないそうです。

そしてカザリゼのもう一つの特徴は、未だプラトーンの影響をほとんど受けていない事から、食物や木材など、有機的な資源が豊富な事でした。

「ゴギトはむしろこの事が、街の潤いを呼んでいると想えていました。『食物が豊富だと言う事は、そこには命がたくさんあるという事。命と命は惹かれ合い、連鎖するものなんだよ。』

カザリゼの街の豊かさと、あまりの人との多さに呆気にとられている僕に、ゴギトは諭すように言いました。

ここはカザリゼの入口広場です。

「己の命を別の命に繋いでいく事。それがこの星に命の光が宿つた瞬間から脈々と受け継がれる、唯一絶対の生命たる制約なんだ。だからスム、食事は良く噛んで下さいね。」

そういうとゴギトは、僕の頭にそっと手を置きました。

「なんでそういうことになるのさ。全然分からないよ。」

僕は子供扱いされたのがなんだかカチンと来ましたので、少しうつとしたように言いました。

けれどもゴギトはすっかり澄ましています。

「まあ、もう宿に行こうよ。」

本当はまだまだ物珍しい街を見て回りたかったのですが、またゴギトに子供扱いされそうと思いましたので、わざとまるで興味もないといつづらうに言つて歩き出しました。

「密接な関係にあるのだけどなあ。まあどうせよ食事は良く噛んでどうるようにな。さあ、スム。僕は宿の前に寄りたいところがあるものだから、先に行つていってくれるかい。」

ゴギトはまた何もなかつたように言いました。

「寄りたいところつてどこだ。」

僕はふて腐れてぶっきらぼうに聞きます。

「少し買い物をしようかと思つてね。ジャッタルイカの街で画が良く売れたものだから。」

ゴギトは画がとても上手なので、行く先々の街でそれを売つて生活しています。

プラトーンの浸蝕が始まる前の世界を描いているらしいのですが、ゴギトの描くのは見た事のない生き物ばかりです。

けれど、どうやら蓬莱にはまだその生き物達がいると言います。

ゴギトは決して嘘をつきませんし何でも知つていますので、きっと蓬莱は本当にあって、そこには本当に画の生き物達がいるのだと思いました。

「では先に宿へ行きます。ゴギトは今夜も画を描くの。」

「ああ、そのつもりだよ。だからスムの部屋だけで良いからね。」

そう言いながらゴギトは僕にお金の入った古い革の袋を渡しました。そつして氣をつけめどりと申つて、ゴギトは人込みに消えて行きました。

しかしそくよく考えてみると、旅に必要なもので特に切らしているものはありませんしこれ以上荷物は増やせませんので、いったい何を買つとこりのだろうと、僕は今更不思議に思つておりました。するとゴイリギリと荷車を引いた、筋肉質で身体の大きな水屋のお

じさんか、心配そうな顔をして話しかけてきました。

「まうや、一人きりかい。」

僕はそうですと丁寧に答えて、宿を探していると話すと、おじさんは親身になってあれやこれやと教えてくれました。

どひやらこの入口広場は電化製品の商いの最も盛んな場所らしく、各地から買い付けに来る機械屋ばかりで、僕のような子供が一人でいるのはなんとも珍しい事のようでした。

そしてたいへんに弱つた事に、おじさんが言つにまこの街には宿が幾つもあるらしいのです。

これだけの大きな街ですからよく考えたら当たり前ですが、コギトとはどの宿に泊まるのかまでは決めておりませんでした。

「それじゃあはぐれちまつたって事だな。1番目立つのは、そり、そここの煉瓦造りの建物だが、あそこのスープはどうにもよくない。使つてる水が悪い証拠さ。安くて飯のうまい宿なら、この機械広場をくず鉄通りとは反対に真っ直ぐ抜けて、市場の外れにとびっきりのがある。まあ見てくれば良くないし、目立たないがね。それに料理の腕は確かだが愛想と口が悪くて頑固なじいさんがいる。まあうちが水を卸してんだ。飯の味は間違いない。」

水屋のおじさんは腕を組んで得意そうにふんと鼻を鳴らしました。

「僕、見てくれば関係ないです。やつぱり水やご飯がおいしいのが一番だもの。それにおじさんは親切でいい人だから、おじさんの言う事は間違いなさそうだ。見つけづらくてゴギトには申し訳ないけれど、僕そこが良いです。」

おじさんはワッハッハッと豪快に笑いました。

「よし、ではまず宿まで送つてあげよう。その後一緒にそのゴギトとこつ青年を探そうじゃないか。物騒な盗賊共が随分幅を効かせてるからな。最近はダイダラの弓もこのへんに来ているらしい。」

おじさんは手を腰に当てて難儀そうな顔をしました。

「そんな申し訳ないです。まだお仕事中なのに。」

僕は慌てて言います。

「まあ、仕事といつてもこいつを引いて街中に水を売つて回つてるだけさ。今日は大きい仕事がなかつたものでね。ウチでのんびりしよつにも家内かないにどやされてしまつしな。」

おじさんはまた大きく笑いました。

僕も一緒になつて笑いました。

「スムと言います。よろしくお願いのいします。」

僕はまだ少し笑いながらきちんとお辞儀じぎをしました。

「殊更賢いとれがんしい子だ。身体からも頑丈がんじょうでよろしい。俺はカヤックだ。よろしくな。」

カヤックさんは感心した様子で僕の頭や肩の辺りぽんぽんと叩きながら言うと、また豪快に笑いました。

なんだか嬉しくて、僕は少し得意になります。

「では僕もお手伝いしますね。」

カヤックさんの引いている荷車の後ろに回ると、思い切り押してみましたが、これがもう本当にビクともしません。

「はつはつはつ、スムにはちょっと重いかもしだんなあ。じゃあ荷車に乗つて水瓶みずがめを抑おさえてくれるか。縛つてはあるがどうにもボロでな。」

僕はすぐに荷車に乗りましたが、もつと重くなつてしまつて大丈夫なものかと心配になりました。

「しつかりつかまつてな。」

カヤックさんがぐつと前に体重をかけると、荷車はゆっくりと動き出しました。

カヤックさんの背中は、なんだかとても逞たくましく見えました。

五、水屋のカヤック

ギイ、ガタゴト、チャブンチャギイゴト
荷車はカヤックさんの機械広場と呼ぶ入口広場を抜けて、市場に入りました。

カザリゼの路面は随分しつかりと舗装されていますが、荷車の上にありますと小さな石のつぶてまで、ガタゴトと割にしつかりお腹をズンズンとやります。

僕はお腹がペコペコで喉もからからでしたので、そのズンズンと来るものがだんだん気分を悪くさせました。

目の前にはチャブンチャブンチャと良い音で揺れる水があり、道の両脇に続く商店は見たこともないような立派な野菜やなんとも鼻の奥にひつつく良い香りの肉や魚の焼き売りなどが、それはもうつさらりと並んでおりました。

後少し宿までの辛抱ですから、それまでなんとかこらえようと懸命に気を張つておりましたが、高級な鶏まで焼き売りされていましたので、その香ばしい香りに僕はこれはもうだめだと、堪らずカヤックさんに尋ねました。

「ごめんなさい、僕はどうやら喉がからからで、このままでは干からびてしまうというふうです。お水を一杯いただきたいのですが、おいくらでしょう。」

僕は「ギトから渡された革の袋を取り出しました。

「ああ、すまんすまん。氣が付かなかつたよ。お代はいいから一杯飲んでみな。」

カヤックさんは荷車を押したまま振り向かずに言いました。

僕は大喜びでお礼を言つと、急いで水瓶の蓋を開けました。するとそこには、水面をキラリと光らせてチャブンチャブンチャと揺れる、なんとも澄み切つた清廉な水が瓶の半分程の所で波を打つていました。

それはあまりの美しさに飲む事を忘れてします程です。

「その脇にある杓で掬つて、隣のお椀で飲みな。杓の先は水以外のもの触れさせないようにな。」

元気良くはいと返事をすると、僕は言われた通り慎重に杓で水を汲み、お椀に注ぎました。

お椀の中ではまだキラキラとしています。

「カヤックさん、本当にありがとうございます。」

僕はそのお椀いっぱいの水をもう一度にぐいと飲み干しました。ゴキュリ、ゴキュリ、ツハアア
すっかりからからになっていた喉からずつと下までが、きゅうっと締め付けるように潤つて、僕はもうなんとも腰が砕けたようになつたのでした。

「おいしい、カヤックさん、本当においしいよ。」

それはもう喉^(のど)がからからだつたからとかそういう問題ではない、今まで飲んで来た水とは明らかに違う水でした。

「があははは、うまいだろ?。ウチの水はちょっと違ひのさ。」

本当にその通りでした。

「こんなによく冷えているのに、なんだかあつたかくつて、柔らかくつて、身体中に染みてくるみたいだ。」

僕は興奮してあわあわと身振り手振りで言います。

「そうだ。それは、命の味さ。水はそもそも星の恵みだ。世界を巡り巡つて全ての生き物を生かす最も慈悲深く清廉なものなさ。だから人が精魂込めて清らかに清らかに蒸留すれば、水の中の慈悲が応えるんだ。その命の光を強めるのさ。そら、水面がしきりに光つているだろ?。」

僕は黙つてキラキラと光る水瓶^(みずがめ)の中を、暫くぼおつと覗き込んで、命のあれこれをなんとなしにぐるぐると考えておりました。

「さあ、そろそろ蓋^(ふた)をしめてくれ。今日は随分出来が良いんでな。こいつを蒸留^(じょうりゅう)した時ちょうど娘が初めて歩いてね。その喜びが水に溶けてるって訳だ。」

僕は蓋ふたを閉じながら田たをパチクリとやりました。

「喜びが水に溶けるの。それで味が変わったりするのですか。」

「そりやあするさ。さっきも言ったが水は本来最も清廉なものだ。

人の想いのような強いものはすぐに溶け込んでしまう。まあ飲んでどんな感情が溶けているのかまで分かるのは、俺達水屋くらいだがね。」

僕はなんだかカヤックさんが格好良かっこうく見えてたまりませんでした。それから暫くダカゴトと商店の間を進み、お店がまばらになつて來た頃です。

「さあ着いたぞ。ここがその宿だ。おおい、客人を連れて來たぞお。

「カヤックさんは荷車ひじるまを停め、大きな声で言いながら宿に入つて行きました。

確かに見た目は少しオンボロの宿です。年期ねんきの入つた木造もくぞうで宿としては小さめですが、なんだかどんと存在感がありました。

暫くしてカヤックさんがまたまた豪快ごうかいに笑いながら出て来ました。その横には小さな丸眼鏡まるめがねのおじいさんがいます。

「おい、カヤック。客人たつてこりやあほんの子供じゃあねえか。」

おじいさんはカヤックさんに怒鳴じなりました。

「じいさん、この子は特別だ。礼儀れいぎも正しいし水の味もよく分かる。ジャッタルイ力から歩いて來たんだ。あんたんとこで休ませてやんな。それにお代をまけるつて言つてる訳じゃねえんだ。文句はねえだろう。」

僕はすぐに荷車ひじるまを降りて挨拶あいさつをしようとしたがおじいさんは顔をぐいと近付けて、まじまじと僕の顔を見ました。

「はじめまして。スムと言います。よろしくお願ねがいします。」

おじいさんは暫く僕の顔を見ていましたが、ふいに入口の方へ向き直り言いました。

「ついて来な。部屋へやへ案内する。一人部屋ひとりへやでいいかい。」

先程より随分穩やかな声です。

「よし、荷物を置いてきな。おい、じいさん。二人部屋だ。もう一人いる。」

カヤックさんはどんと僕の背中を押して言いました。
「よろしくお願ひします。でも一人部屋でいいんです。コギトはいつもそうだから。」

不思議そうな顔をしているカヤックさんをよそに、僕はおじいさんを追い掛け宿の中に入りました。中に入ると宿を利用している人達が俄かに驚いたような顔でこちらを見ています。

「じいさん、子供じやあねえか。子供を泊めるなんて珍しい。それともあんたの孫かい。」

数人のお客様は皆どよめき立っています。

「うるせえ野郎どもだな。わしの店に誰を泊めようがわしの勝手だあろうがい。それにこの子はカヤックが連れて来た。ジャッタルイ力から歩いて来たんだと。全くお前らにもそれくらいの根性が欲しいもんだ。」

おじいさんは怒鳴り散らしながらカウンターで何か書類を書いているようでした。

「へえ、ジャッタルイ力からねえ。まさか一人でかい。たいへんだつたろう。しかし確かに頑丈そうな身体をしている。顔も賢そうだし、目も澄んでいるなあ。こりやあカヤックのお墨付きも頷けるつてもんだ。」

僕は一度にたくさんの大人の人達に囲まれて、頭を撫でられたり肩を握られたりしたものですから、せっかくよく誓めてもらえているのにカチコチと石のようになってしましました。

「スムと言います。ジャッタルイ力からはコギトと一人できました。スムという名前はおじいさんが”澄む”という意味で付けてくれました。」

僕はなんだか真っ白な頭であるで頓狂に答えてしました。

「はつはつはつ、そうかい。そのコギトというお連れさんは見えな

「いな。しかしそれしても君のおじいさん、きっとHゾの出か、見
聞のある方ではないかい。いや、こう見えても私は民族学者でね。
お客様の中の紳士と見受けられる男性が言いました。僕はどう
いう事かと聞こうと思いましたが、おじいさんが書類を書き終えて
割つて入りました。

「サジナ。他人の詮索はいいが、さつきの昼飯でお前またケールを
残したろう。今度やつたら一度と飯は出さんぞ。」

おじいさんは紳士のお客さんに食つてかかりました。

「勘弁してくれよ、じいさん。ケールだけはどうしてもだめなんだ。
自炊なら我慢するが同じ金を出して食べるなら、もうじいさんの作
る以外の料理はとてもじゃないが食べられないよ。」

紳士さんはホトホト困り果てています。

「なら夕飯のケールは食べるんだな。ほれ小僧、お前の部屋の鍵だ。
さあ、カヤックが待ってる。荷物は運んどいてやるから早く行きな。

「僕は、おじいさんや觀念しましたという顔の紳士の男性や、皆さ
んにぺこつとするとカヤックさんのところへ飛び出しました。
宿を出るとカヤックさんは桶おけを持ったおばさんに水を売つていた
ようでした。

「重いぞ。家まで持てるかい。」

「ありがとうね。大丈夫、すぐそこだから。本当にカヤックの水が
あると助かるよ。マリさんによろしく。」

おばさんはチャプチャブとやりながら小路の角を曲がつて行きました。
した。

「お待たせしました。水売れたんですね。」

僕はカヤックさんに駆け寄りました。

「ああ、お得意さんだよ。最近は大きな仕事で手がいっぱい、市
場方面まで回れていなかつたからな。」

カヤックさんは水瓶の蓋ふたをきちんと閉めながら言いました。

「大きな仕事つてどんなお仕事だったのですか。」

「ああ、アイーダまで水を運んだのさ。先方さんが大型バギーを動かしたはいいが、乗り心地じじかが酷ひどくてね。全くまいったよ。それに水のために大型おおがた転ころがすなんぞ、金がかかってしょうがないと思うがね。毎回不思議に思うよ。」

カヤックさんがそう言い終わるか終わらないかという時に、俄にわかに宿の扉がバタンと開きました。

「小僧、最近は盜賊とうぞくが多い。いくらカヤックが一緒でも日ひが沈むまでに戻つて来な。でなきや晩飯は抜きだ。」

おじいさんはそういうとまたバタンを扉を閉めました。

僕とカヤックさんは顔を見合させて、わつはつはと笑いました。

「さあ、「ギトくんを探しに行くか。日暮れまでに帰らないとあのじいさん本当に飯を出さないぞ。では水瓶みずがめは頼んだ。」

そう言つてカヤックさんは荷車の向きをぐいと変えました。

僕はぴょんとそこへ飛び乗り、よろしくお願ひしますと頭を下げました。

ギイッと音を立てて動き出した荷車の上では、大きな大きな水瓶みずがめが、僕のとなりでチャップンチャチャップンチャと嬉しそうに鳴っていました。

六、ティタクの『』

僕とカヤックさんは、ゴギトを探しながらカザリゼ中を回りました。

機械広場から市場、居住区の端から端、くず鉄通りまで時間をかけて見て回りましたが、ゴギトの姿は何処にも見えません。途中何人も人がカヤックさんに声をかけ、水を買つたり世間話をしたりしました。

カヤックさんはその度にゴギトの事を聞いてくれましたが、誰も見たという人はいません。

確かにゴギトは人込みの中にすうっと溶け込むのがなんとも上手ですし、会った人にはなるべく印象を残さないようにしていると言つてありました。カザリゼの表通りは何処も賑やかで活氣ある人達で溢れていましたから、きっと余計に見付からないのです。

しかしカヤックさんは本当に人気者で、その水の評判は街の隅々（すみずみ）まで知れ渡つているようでした。

居住区を回つた際は特にすごく、通る人通る人みんな、大人から子供までカヤックさんに挨拶をしておりました。

居住区の中ではカヤックさんの家にも寄りました。

奥さんはマリさんと言つて、カヤックさんに似て豪快で氣立てが良くて、よく笑う優しい女性でした。

「そうかい、人探しかい。あたしゃあてつきり、勝手に何処ぞのちびを引き取つて来ちまつたかと思つたよ。まあ無駄な酒を減らせるいい口実だと思ったがね。それに良い目をしている。残念だねえ。それとも旅なんて止めてうちの子になつちまうかい。」

マリさんはまるでカヤックさんと同じに、たいへん大きな声でどつかり笑いました。

「俺の酒をとやかく言う前に自分の靴集めをなんとかあしやがれつてんだ。一体何足あると思ってやがる。」

カヤックさんは小さな声で聞こえないように言いました。

「何か言ったかい。全くケツの穴の小さな亭主を持ったもんだよ。妻が綺麗にして何の不満があるってんだろうねえ、スム。あんたはスケールの大きな男になんな。」

マリさんはバンと僕の背中を叩きました。

「全くよく言うぜ。さあ、スム行こう。」

カヤックさんはギイと荷車を動かしました。

「あんたお風呂は沸かしといでいいのかい。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

「はいよ。うんと熱いの沸かしといでやるからとつと見付けて来てやんな。スムもまたおいでよ。」

カヤックさんは振り向かずに手を振り、僕はペコリと頭を下げて荷車に飛び乗りました。

その後僕達は、くず鉄通りまで行きましたがやはりゴギトの姿も、見たという人もありませんでした。

「まいっただ。奴さん何処へ行つちましたのか。あんまり期待は出来ないがちょっと高台からぐるりと探してみるか。」

カヤックさんは知り合いらしいジャンク屋さんのお兄さんに頼んで荷車を預かつてもらうと、くず鉄通りの奥の高台へ向かいました。

「お水、ごめんなさい。人に預けさせてしまつて。」

僕はカヤックさんにとって水が特別大切なものであると感じて以来ましたから、たいへん申し訳ない気持ちになりました。

「なあに、クレタは信頼出来る奴さ。あいつの扱うジャンク品はどちらも旧世界の遺物ばかりなんだが、誰にでも売りはしない。下手をすれば危険な力を持つちまう物だからな。相手がそれを買ってどうするつもりなのか、具体的には分からぬがなんとなく感じるだそうだ。目を見ればな。文明崩壊以後のテクノロジー排斥思想が薄れつつある今、あいつ程の目利きなら大儲け出来るだろうにな。本当の目利きは人を見る目もあるんだと。全く小癪な事を言いやがる。まあとにかくそういう奴なんだ。あいつなら大丈夫さ。」

そう話す力ヤックさんは、なんだかとても嬉しそうに見えました。高台に登るとそこにもほんの少しの商店がありましたがあまり広くはなく、その奥に高く張られた柵の向こう側は、大地の裂け目になつていてどこまでも深い絶壁でした。

大地の裂け目は世界中あちこちにあつて珍しくはありませんが、いつたいどうしたら大地がこんなふうに裂けるのか、僕はいつも不思議に思います。

しかしここから見える力ザリゼの街並は、見たこともないような美しさです。

木造や煉瓦造り、白の土壁や瓦屋根など幾種類もの建物の上で小さな太陽光発電のパネルがキラキラと光っています。

街の中央には一際大きな太陽光発電施設が街中を見据えるように立つていて、その屋根は一面発電パネルで出来ていました。

たいへん小さく見える人々は皆活気に溢れ、プラトーンの渴きのことなど僕の頭の何処からもいなくなっているようでした。

「ゴギトの言っていた”命と命が惹かれ合つ”という言葉が、自然と頭を過ぎりました。

「確かに砂避けに束ねた長髪だつたな。どれ居そうかい。」

カヤックさんは感激する僕の頭をわしゃわしゃとすると、目をくうつと細めて言いました。

僕ははつとしてすぐに懸命に目を凝らしました。

しかしどうにもゴギトはいません。

本当に一体何処に行つてしまつたのでしょうか。

すると俄に、高台にいる人々がざわりとどよめき立ちました。

その人達が揃つて目を向けている先は街の外です。

僕も高台の端に駆け寄つてみると、二列のバギーの集団がこちらに向かつて来ているのが見えました。

その一列目は真ん中の一台を先頭にして、その左右から少しづつ一台一台後ろにズれて弧を描いています。そのすぐ後ろを二列目が横一列にきつちりと並んで走っていました。

後からゆつくりとやつて来たカヤックさんは、見るなり大声を張り上げて皆に知らせるように言いました。

「ディダラの弓だ。ディダラの弓が出た。誰か警備隊に知らせてく
れ。」

その瞬間高台の上は大混乱になりました。

逃げ惑う人やカヤックさんの指示通り警備隊や街中に知らせようと走り出す人、あるいは祈つたり泣き出す人もいました。

「みんな落ち着けえ。大丈夫、力ザリゼには優秀な警備隊がいる。街の男衆も自警団を作つて街を護る。商人の心意気があんな盗賊連中に負けるものか。さあ、まずは落ち着いて家へ戻るんだ。念のため荷物を整理してくれ。」

高台の上にいた人々は少しだけ落ち着きを取り戻し、ざわつきながらも皆速足で家に帰つて行きました。

しかし親子と見られる女性と小さな女の子が高台の片隅にぽつんと残つておりました。

女性は地べたにしゃがみ込み震えて祈つています。女の子はそれをなんとも心配そうに見ておりました。

それに気付いたカヤックさんはゆつくり近づくと、膝をついて落

ち着いた声で言いました。

「カナン。そうか、お前さんは亭主を盜賊にやられたんだつたな。気持ちちは分かる。だがなカナン。今は震えて祈つている時じゃあねえ。その手はこの子を抱きしめるのに使ってやんな。お前さんが護つてやるんだ。お前さんは今頼るものがないと思って、神様か亡くなつた亭主に頼つているのだろうが、この子にとつちやあお前さんだけが頼りだ。分かるな。今自分に出来る事するんだ。お前さんにしか出来ない事があるだろう。さあその子を抱えて家に帰りな。そして荷物を整理するんだ。」

女性はしばし怯えた目でカヤックさんを見ていましたが、大きくこっくり頷くと、深呼吸をして女の子を抱き抱えました。

そしてカヤックさんに深々とお辞儀をして力強く駆け出しました。

「さあスム、お前も俺と来な。ゴギトくんは心配だが、街の誰かが匿つてくれるはずだ。」

僕はあまりに突然の事で頭が真っ白でしたので、とにかく言われるままカヤックさんについて行こうとしました。すると俄かにけたましい銃声^{じゅうせい}が氣でも狂つたように暫く鳴り響^{ひび}きました。

カヤックさんと僕は高台の端の柵^{はし}に駆け寄りました。

「やつぱり駄目か。本当に弾が当たりやしねえ。」

いつの間にか街の前をぐるりと囲つていたたくさんの警備隊が、近付いて来たデイダラの弓に對して発砲^{はっぽう}したらしいのですが、バギーの群^むれは全くなんともないというふうに走り続けておりました。その時ふと、何処かの街でどんな銃弾^{じゅうだん}も決して当たらない盗賊団がいると聞いたのを思い出しました。

「さあスム、ウチに行くぞ。俺はその後自警団に行かなきゃならねえ。」

僕は分かりましたと言おうとした瞬間、胸がドキリとしました。警備隊の中から、誰かがたった一人、デイダラの弓に向かつて歩いて行きます。

「ゴギトだ。」

僕は一目散^{いちもくさん}に外に向かつて走り出しました。

「ゴギトだつて。おい、スム。待て、何処へ行く氣だ。」

カヤックさんも慌てて追い掛けて来ましたが、人混みを擦り抜けいく小さな身体に、追いかけるはずもありませんでした。

僕は閉まりかけている門を潜つて警備隊の列に紛れました。

何の考えもなく飛び出してしまいましたので、しまった追い返されると思いましたが、警備隊の人達は飛び出した僕に何の反応もありません。

理由はすぐに分かりました。

ゴギトです。

姿形^{すがた}は同じですが、ゴギトが實に重々しく、異様な雰囲^{ふんいき}気を放つ

ているのです。

それは理屈^{りくつ}を超えて、警備隊の足を止め、僕に「ギトの名前を呼ぶ事も忘れさせました。こんな「ギトは僕も初めてです。
そうしていると自警団を連れてカヤックさんが物凄い勢いでやってきました。

「スム、何やつてやがる。こんな所に来たら・・・。」

カヤックさんも、自警団の人達も皆言葉を失いました。

「ありやあ、なんだ。あれが「ギトくんだつてのか。」

カヤックさんが振り絞る^{しば}ように言いました。僕はそれに頷くので精一杯^{せいいぱい}です。

すると、「ギトから少し距離^{きより}をおくよつにして、ティイダラの弓^{ゆみ}がのつそり止まりました。

そして先頭の一人が、バギーから覚束^{おぼつか}ない足どりでまるで苦しそうに降りてきます。

「あんたあ、何もんだ。本当に人間か。」

男はこの空氣^{なまくい}の中で、たつた一人動けるようでした。

七、マクスウェルの魔物

たくさんのバギー達もそのモータを止め、辺りに響くのはびゅうと抜ける風の音だけです。

大柄の刺青だらけの盗賊から、列の一一番奥でぶるぶる震えている瘦せつぽちの商人まで、ここにいる全ての人たちが息を呑み、その目をコギトからちらりとも逸それさせずにおりました。

「僕はコギト。君の名前は。

「コギトはゆづくり穏やかな口調でそう言つと、右手をすりつと男へ向けてます。

男はコギトの一つ一つの言葉やその動きを過剰に警戒しながらも、精一杯になんとも堂々と答えました。

「俺は、シオドスだ。」

シオドスは名前を告げると、バギーのドアをバタンと力いっぱいに閉め車体の前へ出ました。

「コギトはほんの微動だにもせず続けます。

「シオドス。いい名前だね。ではシオドス。先程まで君が使っていたその腰の大きな装置は、思念壁発生機だね。それが使えるという事は、まず間違いない、誰かにオレイカルコスを埋め込まれた筈だ。いつたいどうして誰に埋められたんだい。」

「コギトはいつになく重々しい声で言いました。

僕にはコギトの言つている意味がさっぱりと分かりませんでしたが、恐らくカヤックさんも、ここにいる全員がそうであつたように思います。

「さあてね。あんたに答える義理はないさ。それよりあんた、一体何をした。うちの奴らもそいつらも誰一人動かねえし、ひどく息がしづらい。」

シオドスは額に汗を浮かべて、首に巻いていた砂避けのスカーフを乱暴に外しました。

「心配ない。何もしてはいなによ。何かしたというなら、僕という命を隠していいだけさ。さあ、とにかく答えておくれ。聞かせてくれるね。」

「ギトはずいと一步前に踏み出しました。

シオドスはなんとも説明の付かないその圧倒的な何かに、堪らずじりじり数歩下がります。

「いいだろう。教えてやらあ。俺も詳しくは知らないが、白頭しらがこいって呼ばれている博士だ。しかしあんた、何故それを知つてやがる。」

「ギトはシオドスの言葉を聞いたその途端とたんに、目をぐつと閉じ、少しうつむいたようにしました。

「やはりカルテシウスか。ああ、なんという事を。」

「ギトは悲しみや、或いは絶望といった気持ちで心をなみなみと満たしたようななんとも苦しそうな表情になりましたが、すぐに小さく息を吐き、また落ち着いた顔で続けました。

「ああ、どうか聞いておくれ、シオドス。君に埋め込まれたオレイカルコスは小さい。恐らく米粒程の大きさだろう。さつきの思念壁しねんべきの規模きぼを見れば分かるんだ。その大きさならまだ間に合つ。切除出来るんだ。」

それを聞いたシオドスは、ひどく驚いたような顔を見せ、なんとも言葉にならないというふうでした。

すっかり動搖どうようを隠せない様子でしたが、暫くの間口を隙ひまんでから、ぐいとコメカミに中指を当てて見せました。

「確かにこれを埋め込まれてから、あちこちおかしい。長くは持たねえ予感はしてるし、助かるなら助かりたい。だがな、人間かどうかもわからぬ程異様な雰囲気を出してやがるあんたを、どうやって信じろってんだ。」

シオドスは腰の装置にすばやく手を当てました。

「何かしてみる。この装置で空間の断列だんれつを創つくつて、あんたもそいつらも全員真まつだ。」

シオドスはたいへん怯おびえて見えます。

「ギトは少し慌てた様子で、説得するように言いました。

「どうか話を聞いて欲しい。君は本当に助かる。カルテシウスには実験台にされただけだ。いずれは彼もオレイカルコスを取り出しに来るが、必ず命も奪われる。その前に切除してしまおうんだ。大丈夫。僕を信じて。君は必ず助ける。」

「ギトがそう言うと、辺りを覆つっていたただならぬ雰囲気は、すうっと水が引くように消えていきました。

僕達は俄かに呼吸が楽になりましたが、場の緊張は変わらず続いておりました。

「大丈夫。これで信じてもらえるかい。僕は君の状況と似ているんだ。だから良く分かる。まずはその装置を捨てておくれ。ここの中の人々を決して巻き込んではいけない。」

シオドスはカタカタ震えているようでした。

「本当に助かるのか。」

今にも泣き出しそうな声です。

「ギトはこつくり深く頷きます。

「約束だ。君は必ず助ける。」

そうしてまた暫くの静けさの中、シオドスの小さく震える指先が、一瞬装置から離れたように見えました。

その時です。

僕の隣の警備隊員が、まるで自身の怯えをがつさり振り払おうと、いうように俄かに叫びをあげました。

「うわああ。銃は効かんぞお。切り掛けえ。」

そして男にか、或いは「ギトにか、まるで狂ったように切ってかかっていました。

それに続いて全ての警備隊員が、それはもう谷底から吹き上がる突風のように一斉に猛り狂い出しました。

「続けええ。命をかけて力ザリゼを護るんだあ。」

そうしてまるで呼応するように、ディダラの弓の団員達も皆荒々しく猛り声をあげました。

「やつてみやがれ、腰抜け共お。」

辺りはあつと言つ間に戦場の様相に一変しました。

するとその只中のシオドスは、震える手で装置をがつしりと掴み、
その目は再び獸のようにギラリとしました。

「悪いがあんたとは行けない。」

シオドスはギトにそう言い放つと、目を閉じてじっと何かに集中しているようでした。

するとシオドスを中心に、辺りの雰囲気がキンと張り詰めて行きます。

「やめる、やめるんだ。」

「ギトは大きな大きな声で叫びました。

シオドスはカツと目を見開くと、ニヤリと不気味に笑いました。
そしてそれが起きたのは、シオドスの腰の装置が青白く光ったよ

うに見えた、正にその時でした。

「やめろおお。」

「おう 『お』おつ

ほんの一瞬の出来事でした。

「ギトの声と共に、シオドスは激しい真っ赤な炎をあげて燃え上
がりました。

誰もが再び言葉をなくし、その一切の動きをぴたりと止めました。
そしてしばしの沈黙の終わりに、自警団の男の一人が声を震わせ
てけたましく叫びました。

「魔物だ。マクスウェルの魔物だあ。」

その言葉を合図に、辺りはたいへんな混乱に包まれました。蜘蛛の子を散らすように、そこにいた全ての人があがめながら逃げ惑つています。

デイダラの弓の団員も、バギーで逃げだす者もあれば、バギーも

忘れて走つて逃げだすものもおりました。

「デイダラが本当の魔物を連れて来ちまつたんだあ。」

警備隊と自警団は、我先に門を開き中へ中へと逃げて行きます。

そうしてその中の数人の男達が叫びました。

「何してやがる、カヤック。早くその子とこっちへ来い。焼き殺されちまうぞ。」

しかし僕もカヤックさんも、もうその声もまるで聞こえず、ただただ呆然と立ち尽くしているばかりでした。

「ちくしょう、あいつらはもう駄目だ。諦めるしかねえ。」

その言葉を最後に門が閉められるドオオソという音が響きました。そうしてその場に残つたのは、僕とカヤックさん、ゴギトと燃えているシオドスだけでした。

すると俄かに空が暗くなり、赤く燃える炎が不気味に揺れて見えました。

ポツ、ポツ、ポツ、ポツポツ

赤土の渴いた地面に、シミのような斑点があちこちに現れます。

「雨。」

僕は小さく呟きました。

雨はすぐに一面を包みました。ああああつといふ静かな雨音が、辺りに美しく響きます。

既に男の姿を留めてはいないその炎は、雨の中でも消える事なくぼおっと燃え続けました。

ゴギトはそれをびしょ濡れで立ち尽くしたまま、ただただ黙つて見つめておりました。

カヤックさんは何を思ったのか、地面に溜まった雨水を手で掬いほんの少し口に運びました。

そうしてゴクリと飲み込むと、たいへんに苦しそうな声で言いました。

「ああ、なんて悲しみだ。彼だ。彼が泣いているんだ。」

雨ではつきりとは分かりませんでしたが、ゴギトを見つめるカヤックさんが、僕にはその時泣いているように見えたのです。

そして僕自身も、止まらない涙が後から後から訳も分からず溢れて來るのでした。

八、暗闇の星明り

「その後僕は、ゴギトのそばへに駆け寄りました。ゴギトは淋しそうな顔で、自分が恐くなつたかと僕に尋ねましたので、僕は黙つて首を横に振りました。

そしてゴギトはいつものみたいに、僕の頭に手を置いてくれました。

するとカヤックさんがやつて来て、僕達が街を出るための算段を立ててくれたのです。

僕の荷物はカヤックさんが取りに戻つてくれて、僕とゴギトは街の外にあるカヤックさんの浄水場で待ちました。

その間ゴギトはほとんど黙つたままで、僕も何も聞けずにいました。

その頃にはもう雨も上がり、日も随分暮れていきました。

僕はカヤックさんを待つ間、窓の外を見ながらゴギトの事ばかりをぐるぐると考えていましたが、いくら考えてみても僕にはもう何をどうして良いのかすっかり分からなかつたのです。

ですから、もうぐるぐるとどうしようもないというところまで考えた末、ゴギトが自分から話をしてくれる時まで、僕はただゴギトを信じて待つようにしようと決めました。

そうするとなんだか少し胸の辺りのもやもやしたものが楽になつて来て、自然とカザリゼで出会つた色々な人たちの事を考えられるようになりました。

カザリゼは本当に素敵な街で素敵な人たちばかりでしたので、きちんとお別れの挨拶を出来なかつた事や、カヤックさんの水を使った宿のおじいさんの料理を食べられなかつた事などが、今更本当に残念に思えておりました。

そして暫くしてカヤックさんが、僕の荷物と革袋いっぱいの水と、マリさんのお弁当を持って来てくれました。

「ゴギトは深々と頭を下げ、お金を渡そうとしましたが、カヤックさんはそれを受け取らませんでした。

その後カヤックさんとお別れをして、僕達は真っ暗な夜のカザリゼを、アイーダに向かって歩いて出発したのです。

これがカザリゼであつた事の全部です。」

辺りはすっかり静まりかえり、窓から吹き込んでいた風はいつしか冷たくなつておりました。真っ白いレースのカーテンがそよそよと小さく揺れています。

黙つて話を聞いていたアマンダさんは、ふうとため息を吐きました。そして僕を優しく抱きしめて、わた綿のよつた声で言いました。

「辛かつたでしょう。」

僕はアマンダさんの優しさが、なんだか急に胸を締め付けるというふうでした。

「ありがとう、スム。ありがとう。」

アマンダさんは僕の頭を何度も柔らかく撫ななでてくれました。

僕は心の奥の方からなんだか熱いものが込みあげて来て、堪たまらずに声を出して泣き出していました。

「恐かつた。恐かつたんです。優しい街の人達に大好きなゴギトが魔物と呼ばれて、人が目の前で死んで、それはゴギトがした事で、でもゴギトはすごくすごく悲しそうで、なんだか世界がもう真っ暗になつてしまつたみたいで。」

僕は溢れて来る感情をただそのままに口にしておりました。

「スム、あなたは本当に立派よ。かうだこんなに小さな身体で、ゴギトを受け止めようと必死になつて。かけお蔭でゴギトは、本当に救われているわ。でもね、スム。忘れないで。あなたはまだ大人に、私達に甘えていいのよ。」

そうして僕は、アマンダさんの胸の中で疲れ果てるまで泣きました。アマンダさんは黙つたまま、いつまでも僕の頭を撫ななで続けてくれていました。

ああ、どれくらいの間泣いていたでしょうか。

泣き疲れた僕はアマンダさんから離れて、すみませんと小さく謝りました。

「あら、案外人の話を聞かない子ねえ。甘えていいのだと言つたでしょ」

アマンダさんは今度は僕の頭をくしゃくしゃとしました。
僕がうれしくって笑い出すと、アマンダさんも一緒になつて笑つてくれました。

「では食事にしましょう。よくて、好き嫌いなくたくさん食べるのよ。男の子なんだからうんとね。昼間に作り損ねたパイもあるし、鶏肉もたくさんあるのだから。」

「ドアを開けると賑やかない香りがどつとやつて来ます。すると僕のお腹はぐうと應みました。」

「アマンダさん、もしかして昼間は食事の支度をしてくれていたのに、僕が寝てしまつたからそのパイが駄目になつてしまつたのか。もしもそなうなら本当にごめんなさい。」

僕たちは部屋を出て、お腹を擦つて階段を降りました。

「いいえ、ゴギトがあなたが寝てしまつたと言いに来てくれましたから。オープンに入れる前で本当に良かつたわ。私、得意なのよ。それに、ゴギトが寝かせてあげて欲しいって。」

階段を下りるとヒゲの男性が立つていて、厨房とは反対の奥の部屋に案内されました。

するとそこにはたいへん大きな机があつて、その上には豪華な料理がたくさん並べられておりました。その真ん中には立派な鶏肉がどんと置かれていて、それはもう堂々としたものなのです。

僕は一瞬目を瞑まわしましたが、これはいけないと悪い直ぐさま言いました。

「こんな豪華で立派です」とい食事は申し訳ないです。特にあんな立派は鶏は、ものすごく高いのだと、おじいさんから聞いています。アマンダさんは少しひっくりして言いました。

「あらあら、本当にしつかりした子ね。有望な助手だこと。明日か

ら楽しみだわ。言いたい事はよく分かるけれど、子供があまり遠慮するものではなくてよ。さすがに毎日これは出せないけれど、今日は私達が出会ったお祝いですからね。それにこの鶏とりはあなたに食べさせてあげて欲しいって、コギトが持つて来てくれたのよ。この街ではこんな立派なのは手に入らないから、きっとカザリゼから持つて来たのね。」

「ああ、あの時コギトはこれを買ひに行つていたのだと、僕はなんとも言えないほおつと温かい気持ちになりました。

「そうそう、紹介するわ。ここのお宿を取り仕切つてくれています、ジャンバーです。おヒゲがチャーミングでしょう。」

ヒゲの男性が、ずいと前に出ました。

「はじめまして、ジャンバーと申します。先程既にスム様の寝顔は拝見しておりますので、どうか心知れた者として接して下されば光榮です。日々アマンダ様の奔放ほんぱうさに心身を碎いておりますが、必ず諸々お力添え致します故、些細な事でも結構でござります。なんなりとお申し付け下さいませ。」

ジャンバーさんは深々と頭を下げました。

「ありがとうございます。よろしくお願ひします。」

お一人の温かさが滲みるようで、僕はそう言うのが精一杯でした。「ジャンバーつたらせつかくおヒゲを誉めたのに。いつもああやつてつづつぐの。さあ、そろそろいただきましょう。私もお腹が空いてしまつたわ。ほら、席に着いて。スムが主役なのだから、座つていただけないと私も食べられないのだけど。

僕はなんだかまた泣き出しそうでしたが、懸命に堪えながら黙つてペコリと頭を下げ、席に着きました。

「さあ、召し上がれ。」

アマンダさんはこり笑つて言いました。

「いただきます。」

僕はたいへん勢いよく食べました。

お肉がおいしいです。

スープがおいしいです。

サラダがおいしいです。

パンがおいしいです。

パイがおいしいです。

お水がおいしいです。

僕は本当にいつまでも勢いよく食べました。

アマンダさんはゆっくり食事を取りながら、それを黙つて優しく見ておりました。

僕はあつという間にお腹がいっぱいになり、もううつとも動けないというふうでした。

「ふふふ。満足いただけたみたいで何よりだわ。お気付きかしら、ここのお水、カヤックさんの所のお水よ。あんまり美味しいものだから、研究用に取り寄せたものを食事にも使つてしまつたの。」

僕はたいへんびっくりしましたが、どおりでおいしい訳だとなんとも納得したのです。それと同時に、あの宿のおじいさんの料理もきっとこんなにおいしいのだろうと思えて、なんだかたいへん嬉しい気持ちになりました。

「ではお風呂に入つて今日はもうおやすみなさい。支度が出来たらジヤンバーの所にね。お風呂に案内してくれるわ。」

僕はごちそうさまを言つて部屋へ戻りつと、階段の手すりに手をかけました。するとアマンダさんは僕の名前を読んで、座つたままゆっくり優しく話しおきました。

「もう何百年も前に、パラケルススという歴史的にも偉大な学者さんがいました。その学者さんは変わり者だったけれど、本当にたくさんのお業績を残したわ。私達全ての学びの道を行く者は、みんなこのパラケルススの偉大な業績の上で学んでいます。そのパラケルススがね、終生口にしていたと言われる言葉があるの。”思ひは伝わる。山も谷も海も、時間さえ超える。阻めるものは何もない。”現に彼の思想や学問への情熱は、時間を超えて私達に受け継がれているわ。だからきっとあなたの思いも伝わるわ。だから今夜は安心し

て、ゆっくりとお休みなさい。」

アマンダさんはそう言つて優しく笑つて、ティーカップにゆっくりと紅茶を注きました。

僕はアマンダさんに、ありがとうございますとおやすみなさいを言つて、部屋に戻つてベッドにドッカリと横になりました。

ひんやりと冷えたシーツと風が、本当に気持ち良いです。

窓からはまだ真っ暗なだけの空に、小さな星がポツリポツリとあちらこちらで光つて見えておりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507p/>

コギトの雨

2011年10月8日00時37分発行